
【ワールド・エンド・スタート】

初音 柊

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

【ワールド・エンド・スタート】

【Nコード】

N8668M

【作者名】

初音 柊

【あらすじ】

最高の才能。それを持ちながらも「世界一の一般人」である【無崎裕紀】は生きていた。「崎家」に関わり既に十数年。母親変わりの【神崎薫】はその才能を見出だしとある命令を突き付けている。それは「家族を守れ」それだけである。彼の唯一無二の魔法にも超能力にも神にも負けないであろう才能は、それを可能とするに余る命令ではあった。それでも彼の二つ名は……………「世界一の一般人」

『プロローグ』

生まれてきた。

人は、生まれてきた。

そして彼も、生まれてきた。

最高の才能、そして、最高の不幸を持ち合わせて。

唯一絶対の才能、人は言う。

妬む者は『墮落するだろう』と。

嫌悪する者は『個性のない人間』と。

初めから、始めてから全てができてしまう人間は、術者にとって憎むべき人間。

努力では補えない才能、血筋、伝統、受け継がれる秘伝、それらが術者とそうでない者の境目を生む。

しかし、その境の全てを踏みにじる彼の才能は、不幸としか形容できない。

それでも彼は、こう呼ばれる。

『世界一の一般人』と。

1 『再出勤』 A

「ちよ、ちよつとタイム!!」

彼、無崎裕紀の悲痛の叫びは、病室で響く。個室だが、病院で叫ぶ事の悪さを思い出し、はっと口を閉じた。

「五月蠅い」

彼女、裕紀の姉となる魔崎真奈はさらつと言う。事の発端である真奈が指摘する理不尽さは、彼女らしいと言えば彼女らしい。

「い、今さ、僕は怪我人だから……………」

先日、掴み所のない人間、母親の神崎薫から頼まれた用事を、この真奈と共に達成させようと奮起していた。

用事としては無事終了させる事ができたが、へまをした裕紀のミスにより鎖骨骨折による入院、怪我人となってしまったのだ。

「五月蠅い。さっき聞いたらもう完治してるらしい」

「そ、それはそうだけど……………」

とうに手術も終了し、リハビリも終了、完治した鎖骨にはボルトが入れられていたが、裕紀が想像したよりも違和感はなかった。

どちらかといえば医者に「君はもう背は伸びないだろうし、自然に骨をくつつけるより手術した方が良いかもね」と、レントゲンを見せられながら言われた事の方が心が痛かったりする。

これから背が伸びないのかと思うと、裕紀は溜息が吐きでた。

「いいから行くぞ」

真奈は、裕紀の着るパジャマのボタンに手をかける。明らかに脱がせようとする行動。

「うわっ、ストップ!?!」

「どうした」

思春期男子高校生が、フリーター女子に服を脱がされる。この場面だけを見ればいけない妄想が広がりそうだが、真奈としては他意なしに着替えさせて連れ去りたいだけである。

「じ、自分で着替えるから」

「その方が早い」

微笑む真奈。裕紀の頭を数回撫でる。飴と鞭の使い方が上手い訳でもないが、まんまとその罠に引っ掛かるのは裕紀だけだ。

ぴしゃん、と真奈が病室を出た際に閉まる扉の音が、部屋に響いた。

「あ、着替えないと」

見事に飴に引っ掛かっていた、にやけ風味の頬を数回叩いて気合を入れる。

「久しぶりに帰れるのか……」

ぼつりとつぶやいて、ベットから下り、衣服の入った鞆に手をいれた。

着替え終わり、愛着のあった病室を出る。自分の私物は鞆に入れられてあり、帰る支度は終わらせていた。

見慣れた病院内を歩く。もうここに戻って来ないのかという寂しさ、戻って来るのもどうなんだろうといった、相反する考えに苦笑いを浮かべてしまった。

更にいえば、こんな平和だった病院から去らなくてはいけない、ずっとこのまま平和でいたかったという、名残惜しい気持ちもあったのだが。

フリーター女子の真奈は、暇潰しができる為に、ほぼ毎日病室に顔を出していたが、その成果が看護婦に「君の彼女、また来てるわよ」と裏でこそこそ言われるようになっていた。

その度に否定をしていたが、後半になると否定をするのも面倒となり、結果としては苦笑いを浮かべるだけとなる。裕紀が病院で学んだのは、看護婦の勘違い能力の高さと、病院にいるお年寄りのほ

とんどが何かしらのお菓子をくれる事である。

「帰ったら早速仕事だ」

真奈はそう言った、裕紀としては溜息が吐き出される。

「今までサボってたから大変だろうな」

「不可抗力だよ……」

入院をサボりにされると、何をやってもサボりにさせられる気がした。

階段を下り、出口へと向かう。

窓口へ行き、お世話になっていた看護婦に礼を言っつてそのまま出口へと歩いて行った。

開かれる自動ドア。

「なんか久しぶりに外に出た気がする」

うんっーと背を伸ばし、開放感を味わった。

「帰りはどうするの？」

「私の運転」

真奈の歩く先には見慣れていたにも関わらず、久しぶりに見た真新しさも感じられた車があった。

「車に乗るのも久しぶりな気がする」

初めての入院生活を、それなりに楽しんでいた裕紀は後ろを振り返り病院全体の建物を見回した。

「ありがとうございます」

軽く会釈して、車に向かった。

1 『再出動』 B

車の振動、または重力による横移動が懐かしく感じられた。

危険な運転でもなければ、注意を払うような安全運転でもない。

慣れた運転手の運転、まさにそれが適切な言葉だろう。

「なにか変わった？」

今更無言が気まずいと思ってしまうような関係性でもなかったが、それでも会話を始めてみようかと裕紀は気を使う。

「なにが」

「だから家の様子とか？」

会話の反応が薄い真奈だが、それに慣れている裕紀は気にとめる事はない。

「特に……あ」

はっと思いつく真奈。それと同時に、赤信号に引っ掛かる。

「母さんが最近よく帰って来ている」

常に家にはいない薫は、何やら仕事で世界を飛び回っているらしい。そんな薫が帰って来ているが、ただの休日という可能性もあった、しかし、休みの日が存在しない薫としては違うであろう。その薫の頑張りの結果として、真奈のフリーター生活が維持できているのは言うまでもない。

「日本で仕事って珍しいね」

変わる信号、青が点灯され車は発進する。

「多分仕事じゃない」

「ならなに？」

否定に疑問を返し、さらに問い掛けた。

「裕紀が心配だったんじゃないのかな」

「い、いやいや……そんなことないよ」

自分の心配か、日本での仕事を比べると、後者の方に深く頷く

だろう。

「そう、ならいい」

もとより真奈にとっては、そんな事はどうでもよかった、早く帰らないと、毎週欠かさず見ているアニメのオープニングを見逃してしまう。

「ねえ」

珍しく、真奈から声をかける。

「なに？」

その珍しさに、親身になって答えてあげようと構える。

「時間を止める魔法ない？」

「……」

真剣に答えようとした、自分が馬鹿らしくなってしまった。

「そんな魔法はないよ？」

「そう、ありがとう」

この世の中、変えられる事と不可能な事がある。時間を止める事は、世界を終わらせてしまう事でもある。止まった世界で動ける事ができるのならば、それは時間が止まっていけない事となりうる。

そんな事、真奈が一番良く知っている事だろうに。

「なんか眠たくなっちゃったから寝るね」

「おやすみ」

心地よい振動と、妙な安心感が安らぎを与え、裕紀は目を閉じる。

1 『再出勤』C

「到着した」

助手席に座る裕紀の頭を、真奈は叩いた。

「私行くから」

車の鍵を手に持たせられる。

ぱつ、と目を開けるとそこは見慣れた駐車場だった。とあるマンションの駐車場。真奈の癖としては、駐車の際に車をバックして入れようとはせず、そのまま頭から駐車する。だから裕紀が体を起こして見えた風景は、マンション白い外壁である。

何度も見てきた風景。

手に持たされた鍵を見る、どうやら鍵をかけてこいとの暗示らしい。

頭を数回かいた。

寝ぼけた頭は、どうやらまだ復帰しそうにない。

シートベルトを外し、内側からドアを開け、外に飛び出る。

渡された鍵でロックし、きちんとかけられた事を確認する。よろついた足を、寝ぼけた頭のせいにして家に向かう。

このマンションは高い。

建物としても、家賃としても、高い。

本来裕紀のような学生なら、不法侵入か、知り合いが住んでいなければ、ここに訪れる事はできないだろう。

それでも、このマンションに住んで数年。

入居したての頃は、自分に相反する雰囲気、挙動不審を隠せず、それもプラスされ怪しい人物を醸し出していたが、現在は慣れたおかげか『怪しい学生』から『知り合いが住んでいるのかな?』程度まではランクアップを果たしている。

マンション入口、セキュリティは入口にはない。

このマンションには、車や人が入る為の出入口が二カ所あるが、一つは緊急用の為に実質一カ所となるが、その一カ所に、セキュリティ強化を成されている。

裕紀は詳しく知らないが、車や人が通過する為だけに作られたあの建物、機材だけでも値段は億を軽く超えてしまうという。

もちろんそんな事を知らない裕紀は、雨宿りには有り難い程度にしか把握していない。

1 『再出勤』D

マンションに入れば、高級リゾート地のランクが高いホテルと、見間違えう程の圧倒した雰囲気だ。

裕紀は昔からここをあまり好きではない、個性が強すぎる気がするからだ。

無言の圧力に近い何かが、ここを支配している。ただの高級マンションが、その雰囲気醸す理由も見付からない。

だからと言って文句は言えない立場である、大は小を兼ねる、この言葉を鵜呑みにするなら威圧感も必要なのかもしれぬ。

エレベーターに、乗り込む。

体のふわりとする感覚には、慣れていた。物静かなエレベーター内、聞こえる音はない。

目的の階に到着、開く扉。

それでも聞こえる音は、何もない。せいぜい自分の足音くらいだ。エレベーター内の防音対策はきつと完璧なものだろう、だが結局外が静かなら意味がないような気がしていた。

そして、一つの扉の前に立つ。
自宅。

息を吸い、また吐き出す。それを数回繰り返し整える。

よし、行くか。と、気合いを入れてドアノブに手をかける。久しぶりの再開だ、二、三週間ぶりの再開に少しの緊張があった。

開かれるドア。

広い玄関、並べられた靴。

いつもと変わらない自宅。

ただいま、そう言おうと息を吸った時だった。

玄関を上がると、直線の廊下、その直線の廊下の向こうから女の子があるいて来たのである。

廊下を歩いている事、それには違和感はない。普通の行動。問題は、

「お腹空いたー」

その無表情さと、無気力感、人生を投げ捨てたような雰囲気を持つ女の子を、裕紀は誰か知らなかった。

気付けば女の子は近くに寄り、裕紀の手をその小さな手で握りしめ、右往左往と往復するように振り回す。

別に混乱はしなかった、寧ろ、思い当たる節が多過ぎてどれなのか選びきれない混乱がある。

新しい家族なのか、仕事なのか、依頼者の連れて来た子供なのか、それとも勝手に入って来たのか、じつとこちらを見つめる女の子を呆然と見ながら、思考していた。

「お腹空いたー」

再度、女の子は空腹を訴えた。

無表情、無気力、生きる希望を見失ったんではないのかと、勘違いしてしまうような雰囲気の子の手を軽く握り返し、しゃがみ込んだ。

「えーと、僕の名前は無崎裕紀。君の名前は？」

女の子と同じ目線、同じ高さ、恐怖心を与えないようにそうした。そして名前を聞けば、分かる事が一つだけあった。

そして女の子は、その行動にたいした心境の変化もなかったが、無気力に言った。

「知崎有紀だよー」

その瞬間に確定した。どうやら妹らしい。

女の子の頭を軽く撫で、手を繋いだまま立ち上がり、リビングに向かった。

リビングには、彼がいた。

「ただいま」

一応の挨拶。

「よお、久しぶり」

殺崎要一。裕紀の兄だ。リビングにある椅子に座りながら、何かを弄っていたが、裕紀はよく分からないので知らないふり。

「静かに」

ぴしゃりと言ったのは、真奈である。真奈が見ているのはアニメ番組、裕紀は内容を知らないが、今の場面はなにやら魔法を唱えている少年が、泣きながらレーザーのような光りを発射させていた。色々な意味で、苦笑いしかない。

「兄さん、この女の子いつ来たの？」

また視線を要一に変え、黙々と何かを作っている作業も見ながら言った。

「最近だとよ、俺も仕事して返って来たのが一昨日だからよく分かるん」

殺伐としている訳でもない、どちらかといえば目の前の何かを作る作業に集中しているせいだ。

「詳しい話しはそいつに聞け、一日中家にいるんだろっからさ」

真奈の方へアゴをしゃくって、指示した。

1 『再出勤』 E

フリーターと言われるのはまだマシだろう、寧ろ真奈の存在がフリーターという固有名詞の価値をより良く下げている。

確かに、なにかの書類の職業欄に書ける事がない、無職かフリーターの見事に二択だ。

裕紀は真奈に問い掛けようとするが、止めておいた。アニメ視聴中の真奈に話し掛けるのは、自殺行為。そんな事は知っていた、だから尚更に困る。

この状況を打破するキーが、見付からない。

「お腹空いたー」

三度目。

はつと有紀の方を見た、相変わらず無気力と無表情だが、どこも無く寂しさがある気がした。お腹の、空腹感への寂しさだろう。

「うーん……」

裕紀は困っていた、料理はできなくもないが、すべてにおいて普通の料理しか作れない。

まずくもない、だが美味くもないという、なんとも言えない料理。自分でも、食材の無駄遣いな気がしてしまう程だ。

ここは一つ、必殺技とばかりにきらんと目を光らせ、携帯を取り出した。

そう、出前というやつである。

数分間、電話相手に説明し、これで出前の完了である。

時代の進歩と、世の便利さを間近に感じている裕紀は、携帯を閉じる前に時間を確認した。

真奈のしている放送枠三十分のアニメだが、実際はコマーシャルやその他色々であり実質二十五分くらいだろう。

となれば、今はエンディングに差し掛かる時間帯であり、有紀が

どうしてここに来たのか聞くにはもう少しの待機を余儀なくされたが、急ぐ必要もないわけできて、のんびりと過ごしている。

有紀には、真奈の隣に座らせてアニメを見させる事にした。

これで有紀が真奈の二の舞になってしまったら、おそらく裕紀は責任者になるだろう。

苦笑。

とても責任は負えない。

そんな裕紀は、部屋に向かっていた。

自室に用事があったわけではない、それでも何となく行った理由は、数週間の時間が部屋をどう変化させているのか見てみたかっただけ。

ほこりが溜まっているであろう事には、覚悟していた。掃除好きな人間でもない裕紀は、切実に溜息しかでなかった。

そして、案の定であった。

カーテンを開け、ドアを開放してみる。

空気中のほこりは無くなっている気がするが、試しに机の上を指でなぞってみた。

指先には、ほこりがあった。

溜息。

ただでさえ湿っぽい雰囲気の部屋が、余計に湿っぽい雰囲気を増していた。

そして、掃除は後回しにした。

現実逃避というやつである。

携帯に、着信が入る。

相手は出前を頼んだ店の人であった。

通話を始め、分かりましたと裕紀は返答した。

このマンションは、民間としてはトップクラスのセキュリティを誇る。

だがしかし、そのセキュリティの高さ故に厄介な事もある。

例えば、出前を頼んでも自宅に届けられない事や、それを下まで取りに行かなければならない事だろう。

1 『再出勤』 F

退院後、家族間サービス一回目が出前を取りに行くという、何とも言い難いミッション。

部屋を出る、リビングを通過してそのまま玄関に向かう。

向かう際に、有紀を見た。アニメに見入っている、その隣でテレビ画面を指差しながら、細かく解説している真奈。

本格的に、責任逃れの言葉を考える必要があるかもしれない。靴を履き、扉を開ける。

外は相変わらず静か、そのせいか、自らの歩く音が強調されている気がした。

真奈の、帰ったら早速仕事、とは有紀に関してだろうか。

裕紀は考える。

他に何も言わない様子をみると、この考えも間違いではなさそうだ。

こんなに簡単で良いのかな……。

小さい子供の相手。ある意味では大変だが、いつもに比べると簡単過ぎる。

何か、裏があるかもしれない。と、考えた所で拒否権は最初からなかったりする。

つまり、裏があってもなくても、なにかしらは押し付けられてしまっ受け身の立場。考えるだけ、時間の無駄。

やっと来た、エレベーターに乗り込む。

いつも思っていたが、階数の書かれたボタンの一番下には、地下と表記されたボタンがある。

これを押すと、地下に行けるのだろうか。

押してみようかな、そう思ったが、今は出前の食料確保を優先するのが当たり前で、通常通りに一階を押した。

いつかは押してみよう。そう思いつつも、地下ボタンを眺めてい

ると、地上に到着。

さっさと取って早く帰ろうという思いから、自然と足は速くなっている。

マンションの出口をいき、そのままもう一つの建物　裕紀は雨宿りには便利としか思っていないが　の方へ向かう。

内装は、休憩所そのまま、自動販売機、喫煙所等がある。

娯楽スペース等はないが、一日程度ならきつと、ここに泊まって過ごす事は可能だろう。

1 『再出勤』 G

その建物を抜けて外に出ると、

「あざーすっ」

裕紀よりは年上だろうか、茶髪を派手に遊ばせ、髪が整っているのか、いないのか分からないような髪型。本人は、それをカッコイイと信じて疑わない。

それでも服装は、チャライ格好ではない。

「しっかし大きい建物っすね」

出前を頼んだ店の、アルバイトとして雇われている青年で、板前のような格好。まだ見習いだろうか。

「いつもありがとございます」

裕紀は頭を下げる。

「良いつすよ、仕事っすから」

にこやかな青年、見た目はチャライ男だが、中身は性格の良い人物である。

道路脇に止められているバイク、後ろには岡持ちが付けられている。持ち手と蓋のある箱で、出前といったらの代名詞でもある。

運んで来た物を渡そうと、バイクへ向かう青年。

その時、車が裕紀の前で止まった。

不審に思う事はない、その車の運転手が誰なのか分かっているからだ。

車のドアが、開かれる。

「裕くううううん!!」

裕紀にできる事は苦笑い、他にいえば、ない。

車から下りた人物は、一目も気にせず一直線に裕紀を抱きしめた。

「ごめんね、本当にごめんね？ お見舞いに行きたいけど行ったらダメって言われちゃって……」

泣きまねをしながら、それでも目は潤ませている。

抱きしめているが、骨折した方に負担をかけないように、力は込められていない。

その変わりに反対側は、華奢な体からは想像のできない力で抱きしめられている。

もう一度、骨折で入院するかもしれないと覚悟をしていたが、込められていた力がなくなり、離れる。

「大丈夫？」

「うん、もう大丈夫だよ」

そんな二人の様子を見ていた出前の青年。

「彼女さんっすか？ いやー可愛い彼女さんっすねえ」

裕紀を抱きしめた彼女、身長は裕紀より低く、真奈と同じ程。

見た目は、金髪ストレートだが髪の手先にも負けない印象的でいて整っている顔、美人と可愛いの間だろうか。

「そっでーす！ 裕くんの彼女です！」

裕紀の腕を組んで、いかにもな雰囲気を出す。

それを見た青年が、

「俺も負けないっすよ、いつか可愛い彼女をゲットしてやるっ」

裕紀は、もう二人を止める事はできないと悟り、苦笑いが二割増しとなる。

「んじゃっ、頼まれたカツ丼っす」

無理矢理に組まれた腕を、するりと抜け出し、内ポケットから財布を取り出そうとするが、

「あぁっもう、裕くんは払わなくていいっすば」

制止させられる。

「はいどーぞ。おつりはいらさないから……お小遣にでもしちゃって？」

「ホントっすか！？ 可愛いのに優しいって羨ましいっす！」

裕紀はささっと受け取る、カツ丼を持つ少年。なかなかのシユールさだろう。

「貴方もカツコイイわよー？ 裕くんの次くらいかな？」

「あははっ 厳しいっすねー」

そんな、初対面とは思えない程、弾むトークに参加するつもりはない。

「それじゃ、僕はこのへんで」

頭を下げ、早めに切り上げる。有紀が、無表情で無気力のまま泣いているかもしれない。

「あっ！！ 俺も早く帰らないといけないっす」

こちらも頭を下げる、バイクに乗って、そして早々と去っていた。なんで彼女なんて嘘をついたの……」

苦笑い二割増しのまま、にこやかに微笑む隣の人を睨み気味に見つつ問う。

「私が嬉しいからかな」

結局のところ、裕紀の想像の範囲内だった。

「車、早く入れたら？」

「そうだねっ、待ってて裕くんっ」

すたすたと車に乗り込む最中に、先に行ってるから、そう言っ歩いて歩く。

マンションに入り、エレベーターのボタンを押して待機を余儀なくされていた時、

「なんで先に行くの？」

「母さんが遅いから」

先ほどの彼女、神崎薫は涙目であった。

1 『再出勤』 H

「裕くんの意地悪!」

「違います」

「意地悪!」

「違います」

エレベーターが到着する、自動的に扉が開かれる。

中には、小さい女の子がいた。

女の子からすれば、エレベーターが開かれ、言い合いする二人が立っている不思議な光景を見る事となる。

しかも男の方は、何かの器を持っているのでさらに不思議な光景だっただろう。

そんな事も気にせずに、二人はエレベーターに乗り込んだ。

薫は、元々から気にするような感情等なく、裕紀は、自分には無関係だと思っている。小さい女の子からすれば、どちらも同じに見えるというのに。

自宅。

またてくてくと近付いて来た有紀は、「お腹空いたー」と、一度目から変わらない雰囲気ですぐに裕紀に訴えかけていた。

そして先程から、有紀が美味しそうに食べているのは言うまでもない。

裕紀はそれを見届け、ここから本題へと入った。

リビング。真奈は、録画していたアニメを視聴していて、いつになつたら終わるのか分からない。

もちろん、わざわざ遠回りして聞く必要がない為、真奈に聞くとは思わない。

神崎薫、本人に質問を投げ掛けた。

「あの女の子は？ 知崎有紀って言ってたけど」

新しい家族。知崎有紀について。

「裕くんの妹」

親指を立て、ビシツと言いつ放つ薫。

「もっと詳しくは教えてくれないの？」

苦笑いとまではいかないが、一歩手前の裕紀。

「今は無理っ、いつか教えてあげるから」

さっ、と両手を合わせる、おそらくそれは謝罪のつもりらしい。

「……分かった」

裕紀は知っている、軽そうなノリの薫だが、必要以上に口が堅い
ということ。

ここでさらに問い質しても、気付いたら違う話に変えられ、そして何故か、からかわれるだけである。何故か。

「そのかわり、新しいお仕事があります！ 復帰第一回！ イェー
イ！」

よく分からないノリの薫、しかし、裕紀の表情が変わっていた。

ここからはおふざけ無しだ。本気でやらなければ、後日には自分
のお通夜が開かれる可能性だってある。

「腕は鈍ってない？」

「多分、大丈夫だよ」

「なら説明するね」

そして、神崎薫は言う。

「とある魔法使いを見付けてほしいの」

「……とある魔法使い？」

「そう、魔法使い」

魔法とは、不可能を可能にする力、能力といっても良いだろう。

その能力を使う者を魔法使いといい、裕紀のイメージでは杖を持った老人が、長い英語をすらすらと言って魔法を発動させるんだろ

う思っていた。

あくまで、裕紀のイメージだが。

「詳しくは真奈ちゃんに教えてるから、裕くんは真奈ちゃんを守ること、良いね?」

魔法専売ともいえる真奈に、説明したのは正解だろう。

「それから」

薫の表情が、にこやかなものから真面目なものへと変わる。

「彼女できた?」

「……できてません」

裕紀は、深い溜息を吐いた。

あまりモテない自分への溜息ではなく、薫の真面目にたいする使い方がおかしいからである。

話しはそれで終了した。

薫が、「暇だから何か遊ぼう」と提案する。

そして有紀が、物凄く運の良い妹だと裕紀が把握した、ババ抜きで一度も勝てなかったからだ。

相変わらず、生きる希望がないような無表情に無気力ではあったが、どこと無く楽しそうにしている気がした。

殺崎こと、殺崎要一は、有紀の運の良さ説よりも、裕紀の運の悪さ説を押し、神崎こと、神崎薫は、裕紀の運を吸い取ってやったとわけが分からない事を言い始めている。

何度挑んでも、自分の手に持つババは最後まで手に持たされ、いつになっても移動する事なく終わるババ抜き。

裕紀は、心がくじけそうになっていた。

楽しい一時は過ぎていき、時計の針が一周しそうな深夜。

ババ抜き、ミニビンゴ大会、オセロ、その他いろいろと行われていた遊びは終了し、それぞれ寢床についた。

1 『再出勤』Ⅰ

早朝。

目覚ましの鳴り響く音で、目を開けた。

あまり寝ていないせいか、二度寝しようと思むが、上半身を起こす。

昨日は、部屋の掃除に時間を取られてしまったせいか、寝れていない、欠伸が止まらない。

裕紀は、寝癖をつけたまま立ち上がり、洗面所に向かった。

いまだに二度寝しようか悩んでいるが、既に制服に着替えて全ての準備を終わらせた後では、それは出来そうになかった。

「眠そうな顔だな」

真奈は言った。

「珍しく早起きだね」

いつもなら昼まで寝ている真奈だが、今日は珍しくどこかに行くらしい。

リビングには、真奈と裕紀の二人しかいない。

薫は仕事でいない、要一も仕事でいない、有紀はまだ寝ているのだろうか。

「まあ、用事」

いつもなら、一日中家に引きこもる為にパジャマ姿の真奈だが、やはり用事だろうか、外出用の服を着ている。

「どこに行くの？」

「魔法使い探し、今日は学校をサボれ」

「……………え」

引きつる顔、言いたい事はあったが、驚きで声が出ない。

「今日は腹痛、だから学校は病欠」

どうやら裕紀は、腹痛らしい。本人は健康そのもの、ようするに腹痛で休めという事だ。

「……………本気で？」

「本気、とつても本気」

淡々と言うその姿勢には、賞賛に値する。

裕紀に拒否できる権限はない、力もない、ついでにいえば気力もない。

「……………はあ」

薫から、真奈を守れと言われている。

その命令で、どんなタイミングだろうが、場面だろうが、瞬間だろうが、守らなければいけない。いや、守る。

そして、真奈が自己中心的思考を持つ人間だとしても、その命令は守らなければいけないのだ。

「良い弟」

その言葉を残して、玄関の方向へ向かって行く真奈。

眠気は無くなったが、空いたそのスペースに溜息が入り込んだ。

出席日数が足りなければ、留年の可能性もある。

一日や二日なら、まだいい。過去を振り返ってみても、今回のように何度も病欠にされ、学校を休んでいる。

「なんだか本当にお腹が痛くなってきた……………」

留年しても、それを咎める人間は家族の中にはいないが、それでもやはり本人の気持ちにそれを認めない。

「違う、最初から腹痛」

車のハンドルを握った真奈は、訂正を促すような口調で言う。

腹痛の人間を働かせるのはどうなんだろう、と裕紀は苦笑。

「あ、そういえば。探してる魔法使いつてどんな人？」

裕紀は、シートベルトをした。

1 『再出動』

今までいろいろな事をやってきたが、人探しならまだしも、魔法使いを探した経験はない。

魔法使いという存在がない訳ではないが、町中にいる訳でもない。

通行人に「魔法使い知りませんか？」と問い掛けても、返ってくるのは引かれる表情と、冷めた目だけだろう。

だからこそ、少しでも探す相手の情報は多い方がよい。

「魔法使いらしくない魔法使い」

魔法使い、らしくない魔法使い？ 裕紀の頭には、隣で運転する真奈がイメージされた。

「なに」

「な、なんでもないよ」

いつのまにか、真奈の顔を凝視していた。指摘され、とっさに顔を前に戻す。

魔法使いらしくない、それはどういう意味なんだろう。その前に一つ聞きたい事があった。

「その魔法使いさんを知ってるの？」

先程の真奈の言い方が、悪友を友達に説明するような、そんな嫌悪を含んだような言い方であった。

「知ってる、だけど……どこに居るか分からない」
淡々と答える。

これは、楽な仕事かもしれない。

真奈を守るといふ事は、一緒に行動しなければいけない事でもある。

つまり、相手を知っている真奈が見付けてしまえば、仕事はそれで終了という式が成り立つ。

手探り状態は変わらないが、相手を知っているだけでもアドバンテージは大きい。

人を探すだけなら、平和そのものだろう。

「どうやって探す？」

裕紀は、過ぎ去っていく町並みに見入っている。

深い意味はない、外を眺めると必ず町並みを見なければいけないだけだ。

「聞き出す」

「これまた淡々と言う真奈。

「誰に？」

車の窓から、必然的に見える風景。ジョギングをする人がいた、犬の散歩も兼ねているようだ。平和な世界だな、そう考えていた。

「神姫路りん子」

「……………え？」

一瞬だけ、真奈が何を言っているのか理解できなかった。

神姫路りん子。

二つ名『情報殺し』

無崎裕紀の天敵でいて、無崎裕紀を嫌う人間。

過去に、こんな事があった。

初対面で包丁を出され、二回目に拳銃を出され、三回目に毒を盛られ、四回目以降は覚えていない。

小学生の頃の裕紀は、全てを遊びだと思っていたが、中学生になり遊びと本気の違いを学び、高校生からは生きる事と死ぬ事の違いを把握した。

裕紀のメンタル面は、りん子に成長させられたと言っても過言ではない。

「い、いやっ！！他に方法があるよね？！りん子に頼らなくてもなに」

「五月蠅い」

一喝。

「仕事と私情を別けなきゃダメ」

こういう時に限り、真奈は本気を出す。

表情に変化はなかったが、もしかすると楽しんでいるのかもしれない。

1 『再出勤』 K

裕紀は、魔法使いを探す前に、自分の逃げ道を探すのが先だろうと思った。

「い、いやだ！」

車は進む、止まる事はない。

このまま裕紀は、久しぶりの再開を果たすと同時に、久しぶりの死闘を果たす事となる。

「到着したぞ」

「……うん」

裕紀のテンションは、ほぼゼロだ。ここに来て、逃げ出したい気持ちしかない。

りん子が住むのは、どこからどう拝見してもただの民家。隣に並び立つ家と、そう代わり映えしない印象を受ける。

「どうした」

あまりにも、テンションと表情が暗闇に入り込む裕紀を、ちらりと見た真奈が声をかける。

「……」

神崎薫の命令は絶対だ。

自己犠牲を払ってでも、家族を守らなければいけない。

ようするに、可能な限り裕紀は、真奈の近くにいた事となる。

入院していた方が、安全だっただろう。へたをすれば、裕紀はまた入院する事になるが。

「来たぞ」

裕紀が、車に乗ったままぶつぶつ何かを嘆いている時、りん子が住む民家の扉が開かれた。

真奈は車から下りているが、運転手側の全開の窓から半身を乗り出し、車内の裕紀を眺めてていた。

りん子が扉から現れる、真奈は乗り出す姿勢を止めて、りん子の方を向いた。

「久しぶり」

到底、古き知り合いに感激するようなテンションではなかったが、それが真奈のデフォルトなので気に止めないりん子。

「この気配は……」

さつと、半身しゃがみ込み、車内を覗き込み、

「久しぶりね、裕紀君」

「……あは、あはは」

高鳴る心臓、頭の中がぐるぐる回り、目線が定まらない。

いや、目線を合わせないようにしている。

「りん、今日は忙しいから」

真奈の助け船、いつもなら止める事はしないのだが、そこは神崎から直接頼まれた用事だからだろうか。

「オーケー、手短にやれば良いのね」

意味を履き違えているが、間違っていないだけに厄介な解釈だ。

「待て、聞きたい事がある」

「リイオン？」

「そうだ」

りん子はしゃがみ込んでいた体を、元に戻した。

普段が不真面目の真奈が、今は真面目。

それがどれだけ珍しく、そして急いでいるのかを表しているだけにりん子は察していた。

仕事と私情は、別けなければいけない。

一流に近い人間程、それができなくてはいけない。

「彼は日本にいる」

「日本に……？」

珍しく動揺を隠せない真奈。

「何故か、それは分かるよね」

「……」

真奈は分かっていた、憶測だけで居場所を見付ける事のできる、それだけのものを最初から持っていた。

それに加わり、更なる確証となる情報も得た。

「細かい場所も教えようか？」

「いや、いい。ありがとう。日本にいる事が分かっただけで十分」

「そっ、んじゃ今日はこの辺で」

家に帰ろうと振り向きりん子、数歩進んだ所でまた振り向いてこ
う言った。

「裕紀君」

敵に塩を送る、りん子の言動はそれにあたる。

「真奈を守ってね」

それにどんな意味が含まれているのか、裕紀には分からなかった。

1 『再出勤』

『情報殺し』の神姫路りん子が、わざわざ忠告をした。

それをどう解釈するか、その解釈の正しい選択はできたが、りん子にフォローされた理由が見付からなかった。

よっぽど大変な何かが待ち受けているのか、りん子の親友である真奈を守って欲しかったのか、それともただ不安にさせたかったのか。

残念ながら、裕紀にそれらを考える余裕はなかった。

見逃してくれた、それがあまりにも奇跡にも近い現象だけに安堵では済まない何かがあった。

生きている事が既に幸せなんだ、そう裕紀が悟りを開こうとしてしまっている。

真奈が車に乗り込む。

「裕紀、明日疲れるだろうから」

シートベルトの引っ張り出される音が、車内で響いた。

今日だけで、既に疲れてしまっている裕紀だが、まだマシな方だろう。

裕紀には、敵が多い。

性格に難があるわけでも、悪の組織を経営しているわけではないが、敵が多い。

魔術者からは敬遠され、超能力者からは疎まれる。

無関係な人からも、関係する人からも、裕紀の本質を知っている人間からは嫌われる。

努力せずして、全てが可能な人間。

無崎裕紀。

そんな自分を嫌ってはいない、ただし好きでもなかった。生まれながら、現在まで努力をした事がない。

努力しても、しなくても待ち受ける結果は分かっている。平均。

学力平均。

運動平均。

全てが平均。

だからこそ、努力が無駄となるのだ。

毎日、同じ事を繰り返し復習し、勉強に勤しんでも、毎日、墮落した生活をしていても、ほとんど変わらず同じ点数。

羨ましいと思う人間もいるだろう、妬ましいと思う人間がいるだろう。

どうだろうか、全てが平均と決められる人生は。

人には、夢がある。

目標があるから、頑張って生きている人間もいる。

スポーツで優勝し、日本一になりたい、世界一になりたい。

勉強で、トップになりたい。

そういう目標が、誰にだってある。

スポーツや、勉強じゃなくても、構わない。

ゲームの大会で、優勝したい。

最高の音楽を、皆に聴かせたい。

そういう目標だって、人間の生きる糧となる。

しかし、無崎裕紀は、そういう目標がない。いや、目標が見付からないわけではない。

目標があっても、意味がないのだ。

チームプレイならまだしも、個人で成し遂げる目標をもっても意味がない。

全てが平均の人間は、プロフェッショナルに勝てやしないのだ。

最初から、生まれた時から決められている。全てが平均だと。無謀だと分かっているても、チャレンジする人間は馬鹿ではない。相手が最強だろうが、能力が上回っている相手だろうが、もしかすると、という希望がある。

逆転勝利や、番狂わせ等の言葉もある。

普段の力以上の能力を発揮し、勝利する人達だっている。

しかし無崎裕紀にはもしかすると、そんな希望はない。

上回っている相手には負ける、それが確定している。

全てが平均。

何事に挑戦しても、中途半端と言われ、何をやっても上には行けない。

そんな裕紀の本質すら知らずに、羨む者や妬む者がいる。

上を目差しても、無意味。

努力しても、無意味。

無意味。

そんな人生は、どうだろうか。

『なら目標を作ってやる』

『……………』

『心配すんなって』

『……………』

『泣くな』

『……………』

『大丈夫、お前にしかできないことだから』

「起きろ」

「うわっ！」

頭に衝撃が走った。

「もう到着」

頭を叩かれたのだろうか、目を左右に動かして現状を確認する。

目の前には白い外壁。

ここがどこなのか、それだけで把握した。

いつの間にか寝ていたらしい。

「それじゃ私は行くから」

鍵を渡された。

どこかで見えた光景のような気がしたが、この前、見たそのままの光景だ。

「あいたたた……」

車で寝るのは、よろしくなかった。

首や腰が痛い。

「ってまだ昼過ぎなんだけど……」

学校には行けない、腹痛と連絡してある。

「なんか嫌な夢を見ちゃったな……」

過去の自分。

良い思い出もあるが、悪い思い出が多い。

「うーん」

昔の自分も、今の自分も、たいした変化はない。

変わった事と言えば、

「昔の僕は怖いかも」

あはは、笑ってみた。苦笑混じりだった。

深い意味はない。

昔の反省があり、今の自分が存在している。失敗をしないと、人

は成功を選べやしない。

「よし、たまには行ってみようかな」
昼間の暇潰し、用事が決まった。

1 『再出勤』 M

まずは車から下りて鍵をかけ、急ぎ足で自宅に向かう。

今まで何百回繰り返し返してきた行動、今更刺激があるわけでもないが安定という意味では完璧だろうか。

開かれる扉、エレベーターに乗り込む。

防音。

静かそのものだ。

「わっ！」

叫んでみた。

もちろん聞こえるのは、自分の叫んだ声だけ。数秒もかからず、

またの静寂。

「うん、静か」

くだらないと言われれば間違いではない、くだらないと伝えるような人間も近くにいないが。

自宅のある階に到着、開かれる扉。

エレベーターから離れても、外は静寂そのものだ。

軽く走る足音が、響き渡る。

もしかするとこのマンションには誰も住んでいないのかな、そう裕紀が勘違いしそうになる程に静かだった。

自宅前。

家の扉を開ける。

直線の廊下、これまた向こうから歩いてくる人物。

「ひまー」

擬声語にすると、テトテトという足音が似合う。

「有紀ちゃん暇なの？」

「ひまー」

無表情、無気力。

裕紀を見上げるその格好すら、何か無意味が込められている気がした。

（暇なんだね、うん……）

裕紀は、有紀を詳しく知らない。

対応の仕方はこの感じで問題ないだろうが、神崎薫が連れて来た人物なら一般人ではない。

（でも僕、一般人より一般人な気がする……）

裕紀に比べれば、有紀は個性がある。そこは今更気にする必要もないが、有紀が普通ではない。

神崎薫が連れてくる人間が、普通なわけがないのである。

どう対応をするべきか、そこが分からない。

「ひまー」

「わ、分かったから」

じいに見詰める視線、そこに笑顔や楽しむ気力が含まれているのなら子供そのままだが、無表情に無気力だと異様な貫禄すら感じられる。

「あつ、そうだ」

裕紀は閃いた。

「一緒に来る？」

時刻は昼過ぎ、先程思い付いた暇潰しに有紀を付き合わせる。

裕紀にしてみれば、中々の一石二鳥かもしれない。

「うんー」

無表情に無気力、その返事が肯定なのか否定なのか分からなかったが、手を握られたおかげでどちらか把握できた。

「行こっか」

「うんー」

本当に生きる希望が、ないわけではないらしい。

ただ、無表情に無気力、その雰囲気が生きる希望がないように思わせている。

真奈に車の鍵を返すと同時に、これからの報告をした。

「今から行ってくるから」

無返事。

「有紀も連れていくから」

無返事。

「……………」

テレビ画面に集中している真奈に、裕紀の声は届かない。

「ばーか」

「誰が」

試しに言ってみると、コマ単位で返事がきた。

「じよ、冗談だよ……………」

これに返事はなかったが、真奈のオーラが裕紀をチクチクと攻撃していた。

(……………怒ってる)

今すぐに、リビングから逃げ出したかった。

「行ってきまーす……………」

声のボリュームを下げ、退散する事にした。

「いってきまーす」

こちらは有紀、裕紀の真似をしている。

1 『再出勤』N

違うといえば、相変わらず声に気力が込められていない所だろうか。

リビングを出る扉を開く、手招きで有紀も呼び寄せる。有紀もリビングから出ると、扉を閉めた。直線の廊下、玄関へ向かう。

「……………行ってらっしゃい」

既に真奈以外誰もいないリビング、真奈はぽつりと言葉を発した。

相変わらず外は静かだ。

「……………」

有紀が見上げてきた。今からどこに行くの？ そう聞きたそうな視線だ。

答えない理由もないので、素直に答える。

「図書館って分かるかな」

「……………」

見上げたまま首を傾げている、どうやら分からなかったらしい。

「本は分かる？ 紙がいつぱいのぺらぺらめくる」

本をめくるジェスチャーを試してみた、有紀の首が縦に振られる。理解してくれたようだ。

「本がたくさんある場所を図書館って言うんだよ」

「わー」

明らかかな棒読みでの驚き表現だったが、それが基本の有紀だから気にしない事にした。

「そこに今から行くんだよ」

「わー」

無表情だったが、楽しみとでも言いたげな雰囲気だ。
もちろん裕紀の勘違いかもしれないのだが。
腕時計を見た、お昼過ぎ。

「……何か食べた？」

「お腹空いたー」

まずは、ファミレスに行こうと決めた。

誰かと、手を握る。

意識しなければ、ただそれだけだったが、その行動にはいろいろな意味が含まれる。

左手に握られる小さい手。 強くは握れない、だけど離れないように弱くも握れない。

全ての責任を負うような、そんな感覚だ。

(他から見るとどんな感じなんだろう)

良くて兄妹、次いで従姉妹の女の子と遊びに行っているお兄ちゃん、悪くて犯罪者だろう。

通報されていない様子を見ると、親しい間柄に見えているのかも
しれない。 出会って日は浅いのだが。

裕紀は考えていた。

図書館へ行くルートの途中に、ファミレスはあるだろうか。

田舎に近い都会。

矛盾しているようだが、していないような町。

人の少なさ、田舎より行き交う人は多いが、都会と比較してしま
うと数は少ない。

そして、何故か少ないにも関わらず様々な施設が多い。

田舎に近い都会。

例えるならこうだろうか、都会から人が消えてしまった町。

そのような印象を受ける。

「君が無崎か」

背後。

振り返った。

「強そうには見えないね」

髪型、ポニーテール。

表情、にこやか。

身長、それほど高くはない。

「……誰ですか」

知らない女が、そこにいた。

「名前は言わない、言ってもさ、無意味だから」

誰かを彷彿とさせる……そう、手を握っている有紀の無気力と似てい

一瞬。

見知らぬ彼女が、

「二札火化」

真上に投げられる何か。

裕紀には、見えていた。

「札………魔術?!」

空中で静止する、二枚の札。

術が発動する前に、それが魔術だと把握した瞬間。

札から溢れ出す、炎。

先回った判断はできていた、魔術だと把握した瞬間からやる事は一つ。

握る有紀の手を引き、抱きしめるように守った。

数秒間、業火は裕紀達を包み込む。

「……終わり」

薄れていく火、彼女は空中で静止していた二枚の札を、引き寄せよう手に収める。

魔術が終わる。

1 『再出動』 〇

「貴方は誰ですか」

裕紀達に外傷はない、驚いているのは名も知れぬ彼女だ。

「……お前の魔術か」

発動させたのは、裕紀本人。だが、正確には裕紀の魔術ではない。裕紀達を取り囲む、ドーム状の光りが解除され、煌めく塵が風に流される。

魔術防壁。

取り分け発動からの、展開が早い魔術。

（狙いは僕なのか……？）

有紀さえ攻撃範囲に入れていた業火、どちらが狙いなのか判断できな

くない。有紀を、自分の背後に庇うよう隠した。

「……はあ」

長く息を吸い、深く溜息を吐いた。

「無崎裕紀、抵抗しなければ楽に終わらせてやる」

一方的で、理不尽な解釈。

「苦しんで死ぬより良いと私は思うけどね」

にこやかな表情。違和感を覚えた。

人を殺そうとする場面で、笑っている事にはない。

その表情が、無理矢理に笑っているような気がしたのだ。

「……」

だからといって、疑問を聞けるような雰囲気でもない。

ましてや相手の心配をしている、時間も、余裕もない。

「……そう、返事は無しか」

あーあ、残念。彼女は肩を竦めながら言う。相変わらず、表情はにこやか。

「四札散化」

今度は四枚の札が、投げられる。

「裕紀を中心に、四枚の札が取り囲むよう静止。

「二札火化」

前後。

二枚の札から、炎が吹き出されようとしている。有紀を抱き抱えての、回避は不可能。

裕紀は、有紀から離れた。

諦めた訳でも、逃げ出した訳でもない。

有紀を取り囲む、光の壁。

先程、発動させた魔術防壁。

有紀だけを覆う魔術防壁は、炎から身を守る。

その間、裕紀は走る、設置された札が、魔術を始める前に。

「無崎、お前は甘い」

札から、炎が吹き出される。

マグマのような灼熱、前後から流れ出るそれは有紀を襲う。

魔術防壁が、完璧に防いでいた。

「はあああああ!!」

走ったまま、その勢いのまま反撃にでる。

ただ殴り掛かる、それだけの行動。

「一札反化」

更に投げられる札、彼女の目の前で空中静止した。

殴り掛かる裕紀の体が、真横に飛ばされる。

コンクリートの塀へ、叩き付けられた。

「がはっ?!」

激痛。

どの部分が痛いのか分からない、全てが痛い。

「あのね、早く帰りたいから抵抗しないで」

薄れる視界、泣いている訳でもないのに、目の横からながれ流れる。

ぎこちない動きをする手、触って確認する。
指先が赤かった。

(あ……………血……………か)

そのまま、握り込んで拳にした。

拳で自分の脚を殴り、気合いを入れる。

立ち上げればしたものの、体のどこかからくる激痛。

(あはは……………痛いな……………)

気が楽になった、痛いのは痛い、だけど慣れてしまっている。

余裕を持てる立場ではない、しかし、何故か、気楽なものだった。

1 『再出勤』 P

有紀を見た、ぼやける視界。

見え方は曖昧だったが、無事のようだ。札の魔術も、終わっている。

「無崎裕紀、諦めないか」

彼女はこちらを向いていたが、表情を見る気にはなれない。もう一度、有紀を見る。

無表情、無気力、魔術防壁の中でただ立っている。

(有紀ちゃん……少しはリアクションしようよ……)
裕紀は気楽なもんだ。

いや、考えを気楽にしようとしている。

慌てない、冷静に、動じない。

(ただ図書館に行くだけだったのに)
顔を流れる血が、止まらない。

扉に叩き付けられた時、当たり所が悪かったらしい。

出血多量。

死。

死ぬ事はないだろうと、思う。神崎薫が、勝手に死ぬ事を許さ
は
ず
が
な
い。

よろける足を、前に進ませる。

足が上がらなかつたので、引きずりながらも歩く。

(なんで僕はこんなことになってるんだろう)

昼下がり、平和、だった。

今は血だらけだ。

ゆっくりと、引きずる足を動かす。

久しぶりの戦闘、体が鈍っていた。油断していた。

「あの……」
気が遠退く。

「有紀ちゃんだけは」

呼吸がなんだったのかすら、覚えていたのかも分からない事すら忘れそうな感覚。

「見逃して……」

全てに、力が入らなかった。

「だ」

夢と、現実の、中間点。

「 ったらどうし 」 それがなんなのか、考える発想までに至らない。

「もんだい」

騒がしさに、だんだん寝苦しくなってきた、寝苦しいという発想から連鎖され

、ここはなんだ、その連鎖に続いた。

「葬式には行くから」

はつきりと、単語が聞こえた。

葬式には、その言葉のお陰で気付いた。

死にかけて自分の事を。

「あ、……起きたぞ」

聞き覚えしかない声、魔崎真奈。

「なんだ、がっかり」

聞き覚えしかない声、神姫路りん子。

頭が痛い、よく分からない痛み。体の感覚が戻ってきた。

右手に圧力を感じた、これは握られている感覚。

体を起こす、最初から最後まで、体のどこかが痛い。

手を握っていたのは、知崎有紀。

無表情、無気力。初めて見た時も、楽しい時も、寂しがっている

であろう時も

、この前も、変化のない表情と雰囲気。

涙を流す事も、安堵する事もせず、ただ有紀は手を握っていた。

「……………お、おはよう」

時間は深夜だ。

それを裕紀が知っていようと、他に言う言葉もなかった。

1 『再出勤』Q

どうやら生きていたらしい。

毎回、死の覚悟はするのにどういう理由か死なせてはくれない。死にたい願望もないのだが。

「がっかり」

そう言ったのは、真奈。

「たかが魔術者に負けてどうする、それでも私の弟か」
少しは、身体の心配をして欲しかった。

知らない人間に殺されかけてもこの反応、死んでしまったとしても反応は変わらないかもしれない。

「がっかりね」

これを言ったのは、りん子。

「そのまま葬式が始まればよかったのに」
言いながら、裕紀に近づく。

腹筋の辺りを、わりと本気で殴られた。

びくつく、びくついた行動でまた体のどこかが痛い。

「痛たたた……」

殺されかけた事よりも、こっちの方が、怖かった。

「がっかりー」

これは有紀。

頑張って守ったのに酷いなー、と思いつつ苦笑した。

「んじゃ、そろそろ帰る」

りん子が、片手を上げてゆらゆらと振る。

「分かった。ありがと」

真奈が少し、頭を下げる。

「良いつて、別に。そいつを殴れたし、ね」
どす黒い、オーラが、見えた気がした。にやけながら、言っ
たせいでろっか。

「んじゃね」

りん子がドアをスライドさせて、退室した。

ぴしゃん、ドアが閉じる音が響いた。

その音で気付いた。

(あ、……ここ病室だ)

気付いてみれば、どこか見た事のある風景。壁との間合いや、明
かりが照らす角度、それはそうだ、何日か前に退院したはずの病院、
同じ病室。

(また……また……また……)

理由はないが叫びたかった、ただそれもできないので、

「はぁぁー……」

代わりに、溜息を吐き出した。

1 『再出勤』 R

自分の腕を見入った。

包帯の一步手前、湿布のような何かが当てられている。頭を触った。

布らしき物が巻かれていた、これこそ包帯だろうか。

(……………)

分からなかった。

全てが、分からなかった。

殺しに来て、殺されなかった。

有紀を見下ろした。

覆い隠すように両手で、優しく手を握られていた。

有紀も、こちらを見ている。

その無表情からは、何を考えているのか分からない。

「怪我はない？」

意識を失ったら、魔術防壁も終わってしまう。もとより魔術防壁は、対魔術だけの防壁。刃物や拳銃といった、物理的な攻撃には無力。

「だいじょうぶー」

有紀が嘘を付く理由もないので、大丈夫なのだろう。

ほっとした。

ふがいない自分のせいで有紀に傷を付けてしまったら、どんな瞬間だろうと悔やみきれない。

有紀の、無表情で無気力な視線。

そこで気が付いた。

有紀なら、見ていたはずだ。

何故、自分が殺されなかったか。

何故、見逃されたのか。

「ねえ、有紀ちゃん」

無表情で無気力な視線に、真剣な視線を返す。

「僕が倒れたあと、どうなったの？ あの人はどうしたの？」

有紀の表情は変わらない。あの瞬間に恐怖もなければ、あの瞬間に戸惑いもないのかもしれない。

手を握ったまま、ベットの横でただ立っている少女は言った。

「じっ」と見て、どこかに行っちゃった」

「なにもしないで？」

「うん」

なにもされなかった？

裕紀には分からない。

殺そうとして、立ち去る。

不利な立場なら、可能性はあるが、明らかに有利な立場で、立ち去るだろうか。

「裕紀」

呼んだのは真奈だ。

「私は帰るから」

腕を組み、壁に寄り掛かっていた真奈は反動を付けて壁から離れる。

1 『再出勤』 S

「有紀、おいで」

真奈は呼び寄せる。それに有紀は、素直に従う。

「じゃあね」

有紀の手を握る真奈は、振り向きもせずにとりかかった。

ドアを開き、退室してからぴしゃり、とドアが閉められる。病室から、誰もいなくなった。

「……………」

静けさが、身に染みわたる。

すると、病室のドアが開かれる。

裕紀は直ぐさま、目をやる。

「やあ、また君？ そんなに病院好きなの？」

「あ、あはは……………」

白衣を着た男。

もっとも、最近に会っていた裕紀の知り合いの男だ。

その夜。裕紀は眠れなかった。

様子見での検査入院、病院での一泊が決定した夜。

裕紀は悔しかった。

入院生活で、体を動かしていなかったと言えば嘘偽りなく、正しい。

アドバンテージが向こうにあったにしろ、それは負けて良い言い訳にはならない。

自分のせいで、もし有紀に何かがあれば、どうやってでも消化ができる気持ちではない。

もし、あそこで逃げていたら。

もし、あそこで戦っていたら。

もし、……。

あの場面で可能な、全ての行動を考える。
考える事によって、今後の対策になる。
いや……、違う。

考える事によって、現実から逃げている。
正当な理由をもって、現実から逃げている。
自分の弱さから、逃げる。
逃げる。

(……違うだろ)

一つの約束。

裕紀の生きる糧。

(いつまでも……)

自分から逃げるな。言い聞かせた、今はやる事がある。それが終わらないと、逃げる暇すらない。

瞼を閉じる。

深く長い深呼吸で、鼓動をゆっくりとしたものにする。

なにもかも考えずに、睡眠に身を任せた。

一瞬の違和感、不意に目だけ開ける。

「お、おはよ」

目の前には、大きな顔があった。

「おはよー」

有紀の顔だった。ベッドで寝ている事を思い出す。どつりで顔が横になって見えていた。

体を起こす。

昨日に比べれば、体に感じる痛みは少ない。

「行くぞ」

不意に発せられた声、ぱっとそちらに向くと、真奈が腕を組んで立っていた。

見下ろされていたわけでもないが、威圧感は何もない。

「行くって、どこに」

「魔法使いの場所」

「……………あ」

すっかり忘れていた。裕紀としては何もしていない為、色々と実感が湧いていなかった。

「早く、行くぞ」

「いくぞーいくぞー」

「わ、分かったから……」

手元に鏡がないので分からないが、苦笑じみた顔をしていたに違いないかっただろう。

楽しそうにしつつも無表情で無気力の女の子と、けだるい雰囲気を出しているものの、多少ばかりは弟の心配をしているであろう姉。昨日の出来事が、まるで嘘のような平和がここにあった。

病院を出て、外にいた。

いつしかのような、思い出に浸る事はない。

お菓子を貰えるお年寄りの方々に会いでもすれば、少しは思い出として蓄積されるだろう、しかし、寝て過ごした時間だけでは思い出と言っていいのかすら分からない。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8668m/>

【ワールド・エンド・スタート】

2010年10月8日14時15分発行